ペン俳句会　句会報（三二四号）

令和三年九月二日（木）

新型コロナ感染状況に鑑み「メール句会」「オンライン句評会」を実施。
兼題『新涼』『声』

首藤　しずを
新涼やしゆるりと薄き鉋くず
新涼や李朝青磁の薄き肌
山走る二両編成秋の声
レース果て一帆静か今朝の秋
かなかなや遠くに何を忘れ来し

中村　晃也
虫の声三歩歩めば三歩先
湖の辺の茜に染まる蝉の声
ゴム毬の凹みしままに夏果てる
白鳥の声聞くまでの雅びかな
新涼の風の渚や深呼吸

長尾　進一郎
新涼や連山の縁際立てり
鳴く声の上手下手あり庭の虫
無人駅に時を待つ人八月尽
練習のコーラス響く秋初め
解りたる顔で歩きぬ美術展

森田　元斐
たそがれの大樹の幹へ秋の蝉
向日葵のはじける笑顔プロヴァンス
積み上がる半値のシャツや夏終わる
松籟に赤子泣き止む秋涼し
うらがへり枝去る一葉秋の声

高橋　由紀子
新涼や雨上がりの芝しゃきしゃきと
秋出水堰の荒波天走る
熊笹を分け入れば早や秋の色
川向こう君の病室秋夕焼
庭手入れ木瓜の実ぬっと現わるる

志村　良知
法師蝉初声聞きし日を競ひ
朝顔のほころび揺るを待ちゐたり
新涼やパテオの風の変はりゐて
大南風（おおみなみ）ざわつく心鳴るリスト
訃報受く外に名残の法師蝉

宮原　凪
セピアとは想い出の色晩夏光
ひと夏を鳴き尽くしたる骸かな
ひらきゆくものに静寂（しじま）や蓮の花
洗顔の水の直線涼新た
老僧の読経に和すか蝉しぐれ

大津　そうかい
ようようと電話の来たる夜の秋
千年の扶余の石塔秋の風
夜の秋や皿に残れる茄子の色
哭声の島に湧き出る秋茜
新涼や潮の香肌に残りゐて

新田　ゆふき
苔に生ふ落葉松清か秋の風
星空は雨雲の上山の宿
火口湖でありし湿原鰯雲
地球の声火口に深く赤蜻蛉
涼新た爪切る音の心地良く

内藤　あした
黄昏や蝉の合唱聞き分けて
草叢の中声を追ひちんちろりん
夕焼けの窓に跳ねゐて秋暑し
新涼や早起きをして庭掃けば
ヤモリの子窓に張り付く指五本

安藤　晃二

涼新たプロゴルファーの一番ティー
秋涼し拍手の堂を置き去りに
疫に耐へ残暑の見舞ひ燥ぎたる
駅ホールにハイヒール鳴り涼新た
長屋門守る欅や秋の声

斉藤　まさお

新涼の少しやせたね猫のモモ
かなかなの声呼び覚ます無垢の時
吾が余生急ぎな立ちそ秋の風
行く夏や風にくるくる氷旗
禅僧の作務衣のうなじ日焼けかな

西川　知世

アカシアに夕陽触れゐて秋の声
二百十日飛行機雲の尾の緩び
アスファルト掘り起こされてゐる秋暑
厄難の枚挙にも飽き文月尽
富士を離れて新涼の雲迅し

次回は、令和三年十月七日（木）です。
兼題は、首藤しずをさん出題の『秋高し』、『天高し』類題、西川知世さん出題の『引』です。

季語を学ぶ　初学にかえって

西川　知世

「秋高し」は「秋高くして塞馬肥ゆ」（杜審言）匈奴入寇に対しての雄心を示す詩からとられた言葉で、転じて秋空の高く澄み切ったさまをいうと歳時記にある。大陸でなくても日本でも秋空の高さは美しい。傍題として・秋高、天高し、空高しなど。都会であれ、郊外であれ、空を見上げ空が高いと仰ぎ、ことさら秋を感じることは自然なことであるから、ただ事俳句に陥る危険性も大。句の中に個性や独自の視点が大切になる季語である。

秋高し天文台のともしかな　正岡子規
天高し蔓の先皆よるべなき　高浜虚子
痩馬のあはれ機嫌や秋高し　村上鬼城
十字架を象嵌したる天高し　阿波野青畝
わが庭の真中に立てば天高し　山口青邨
天高し雲のひらくにせばむるに　皆吉爽雨
大雨のあとかぐはしや秋高く　星野立子
灯台に螺旋階あり秋高し　池田秀水
長城のここぞ胸突天高し　市来あつ子
天高し小浅間を野に置忘れ　山田孝子